

教育・研究等業績一覧

履 歴					
フリガナ	ホサカ カズタカ	性別		生年	1977年
氏名	保坂 和貴	男			
所属	保育学科	身分	准教授		
学 歴					
年 月	事 項				
2002年3月	慶應義塾大学 文学部 人間関係学科 人間科学専攻 卒業 人間関係学士				
2003年3月	慶應義塾大学 教職特別課程 修了				
2003年4月	北海道大学大学院 教育学研究科 修士課程 入学				
2005年3月	北海道大学大学院 教育学研究科 修士課程 修了 教育学修士				
2005年4月	北海道大学大学院 教育学研究科 博士後期課程 入学				
2011年3月	北海道大学大学院 教育学研究科 博士後期課程 単位取得退学				
職 歴					
年 月	事 項				
2003年10月	北海道大学 ティーチングアシスタント 「基礎演習（発達心理学）」（2004年2月任期満了）				
2006年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校 保育福祉科 非常勤講師 「乳幼児心理学」「家族援助論」「教育相談」「卒業研究」（2011年9月任期満了）				
2006年4月	近畿大学九州短期大学 通信教育部 非常勤講師 「乳幼児心理学」「人間関係」「総合演習」（2011年9月任期満了）				
2007年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校 視能訓練士学科 非常勤講師 「人間発達学」（2011年9月任期満了）				
2008年10月	北海道大学 ティーチングアシスタント 「英語演習（中級）」（2009年3月任期満了）				
2009年9月	拓殖大学北海道短期大学 保育科 非常勤講師 「教育心理学」（2011年3月任期満了）				
2011年4月	北海道ハイテクノロジー専門学校 こども・こころ学科 非常勤講師 「発達心理学」（2011年9月任期満了）				
2011年4月	拓殖大学北海道短期大学 保育科 非常勤講師 「保育の心理学Ⅰ」「教育方法」「保育内容研究Ⅳ（こどもの言葉）」（2011年8月任期満了）				
2011年9月	拓殖大学北海道短期大学 保育科 助教				
2016年4月	拓殖大学北海道短期大学 保育学科 准教授				
教 育 業 績					
1 担当授業科目（2017年度）					
科 目 名	出講場所	期別	曜日	時限	備 考
[保育学科]			(前期・後期)		
保育の心理学Ⅰ	103	前期	水	3	
保育の心理学Ⅱ（A・B）	203	後期	火・金	4・3	
教育方法（A・B）	303	通年	月・金/水	5・1/3・4	
教育心理学	101	後期	月	3	
保育内容研究Ⅳ（A・B）	303	前期	月	2・4	
基礎科目入門	102・203	通年	火	2	
保育実践演習	ML	通年	火	3	
総合芸術・総合芸術表現		後期	月・金	5・4	
教育実習指導（1年）	302・101	通年	金・月	3・1	
教育実習指導（2年）	302・101	通年	金・月	4・4	
保育実習指導Ⅱ・保育実習指導Ⅲ（1年）	101	後期	火	5	
保育実習指導Ⅱ・保育実習指導Ⅲ（2年）	101	前期	金	5	
[農学ビジネス学科]					
心理学	103	前期	水	4	

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>授業全般については、学生が心理学や保育・幼児教育における既存の理論・知識・技術を覚えることのみならず、それらを子どもをはじめとした人間の心理や保育・幼児教育の現場の事象に適用し、思考し、実践できるようになることを目標としている。そのため、以下3点に留意して授業を進めている。①基本的な理論や知識を保育や幼児教育の現場の事象に具体化して説明すること、②基礎的な心理学実験やグループワークを取り入れた学生参加型の活動を展開すること、③単元終了ごとの確認問題、およびリアクションペーパーの作成によって理解度・達成度を把握すること。主に、「講義→実践→(自己)評価」というサイクルを通して、理論や知識・技術のインプット(覚える、記憶する)とアウトプット(表現する、実践する)の両輪をバランスよく学ぶことを意図している。</p> <p>講義科目については、アカデミック・スキルの獲得を目指し、ノート作成の技法、メモの取り方などの指導を含めた授業を行ってきたが、ノート作成が自己学習の素材になるなど一定の成果が出ているため、今後も継続して取り組んでいきたい。演習科目について、今年度は以下3点について教育方法の転換を図った。①文献購読の指導(保育の心理学Ⅱ)、②ICTを活用した文献理解(保育の心理学Ⅱ)、③パフォーマンス理論に基づく授業改革(アクティブ・ラーニングの形式導入)。①について、従来の高等教育の方法として用いられたレジュメ作成・発表を用いて授業を行ったが、レジュメ作成の「やり方」を綿密に指導することによって、学生の文書作成の向上および文献解釈の深まりに寄与した。②について、文献の内容を映像メディアで表現するという課題を設定した結果、文献の要点を捉えながら映像作品を作成するグループが多く見られた。新たなメディアに親しんでいる学生にとって、文字だけでなく写真や動画によって表現技能を磨くことが重要な課題になると考えられる。③教育要領など文書購読が苦手な学生にとっても、表現形態を変えること(教育要領の文書をもとに演技する、など)によって読みが可能になることが明らかとなった。振り返りを工夫することで、難しい文章でも読むことの重要性が理解できるよう改善したい。</p>																				
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>H29年度(後期)は、「教育方法」を保育実践やワークショップ、プレゼンテーション等を行なう参加型授業、「教育心理学」をノート作成等の学習方法そのものを学ぶための講義形式の授業として、「保育の心理学Ⅱ」は文献購読の授業として展開した結果、同一学年同一時期の開講にもかかわらず科目間の混乱がなく学生に異なる授業である認識を与えることができた。前述したように科目ごとの明確な授業展開方法の差別化が功を奏したと言える。</p> <p>授業改善アンケート(教育方法)の結果、授業に対する積極性4.0(1-5ポイントで評価。以下同様)、満足度4.1、理解度4.0、ものの見方・考え方の深まり4.0と、学生の意欲を喚起し満足の得られる授業を展開できたと考えている。しかし、クラス別に見ると積極性Aクラス3.7に対しBクラス4.3など、満足度・理解度・考え方の深まりにおいても0.5ポイント前後の差が見られた。「教員と学生とのコミュニケーションのあり方」についてはAクラス4.4、Bクラス4.2と差が大きくない点から考えると、クラスごとの特徴が授業のあり方に大きく影響したように思われる。</p> <p>次年度以降も、授業展開の差別化を図ることで学生の理解・表現の深まりを促したい。またその深化のために、特に以下3点が課題である。①リフレクション(振り返り)の充実。文章を別の表現形態で表した後、もう一度文章に戻って解釈したり、表現のあり方を再度吟味したりするなど振り返って深める工夫が必要である。②ポートフォリオの充実。学生の学びを結果のみにおくのではなく、学び成長する過程を記録する方法を用いることが課題である。これは就職後の保育記録へも続くものとなるため先行事例・実践を参考にICTを活用したポートフォリオを作成していきたい。③文献購読の充実。学生の理解や興味に基づく文献を設定し、それを輪読しながらレジュメ作成・発表という大学のゼミナール形式を展開する。</p>																				
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>特定の教科書は使用せず、科目ごとにレジュメ・プリントを作成し授業を行った。とりわけ心理学系の科目においては、平易な心理学実験を取り入れ、グループ活動等が行えるように配慮した。</p> <p>実習関連科目については、複数の教員による分担展開となっているため、現在実習に関するガイドラインを作成中である。</p>																				
<p>5 学生の指導(課外活動・厚生補導等)</p> <p>(主要10件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>子どものひろば 企画・指導</td> <td>深川市文化交流ホールみ・らいイベントの保育学科学生指導</td> </tr> <tr> <td>み・らい 子どもまつり 指導</td> <td>人形劇・オペレッタの学生指導</td> </tr> <tr> <td>木育ひろば 企画・指導</td> <td>北海道森と緑の会主催イベントへの参画</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>	子どものひろば 企画・指導	深川市文化交流ホールみ・らいイベントの保育学科学生指導	み・らい 子どもまつり 指導	人形劇・オペレッタの学生指導	木育ひろば 企画・指導	北海道森と緑の会主催イベントへの参画														
子どものひろば 企画・指導	深川市文化交流ホールみ・らいイベントの保育学科学生指導																				
み・らい 子どもまつり 指導	人形劇・オペレッタの学生指導																				
木育ひろば 企画・指導	北海道森と緑の会主催イベントへの参画																				
<p>6 その他</p> <p>(主要5件以内)</p>	<p> </p> <p> </p> <p> </p> <p> </p> <p> </p>																				

研 究 業 績				
1 研究分野・活動 (記述式：350字以内)	<p>研究分野：人間の学習・発達過程の研究</p> <p>幼児期の子どもの「遊び」や「いざこざ」といった日常的な出来事を対象として、それがいかなる学びの場・発達を拓くものなのかについて理論的・実証的に研究を進めている。とりわけ、人間の学びと発達を支える情動や意欲、身体的な経験、および仲間関係の重要性について焦点を当てている。幼児期は、大人になると内化され見えなくなる情動や意欲のあり方が、身体的なふるまいとしてあるいは言葉として外的に豊かに表現される時期である。また、子ども同士のかかわりには、大人が簡単には達成できないような個をも集団をも生かそうとする力動的な関係の仕方が存在する。このように、大人への過渡期として子どもを見るのではなく、人間存在にのっての心理のあり方、人間関係のあり方の本質を捉えるために、子どもを対象として研究を行っている。</p>			
2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)	<p>子どもであれ、大人であれ、人間（の心理）が変化するには何らかの共通する過程と原理が存在すると思われる。それゆえ、これまでの幼児期の遊び・いざこざの研究に加え、ミュージカル活動における学生の学び・発達、あるいは演劇における身体表現活動を研究することによって、人間（の心理）の変化の過程と原理を解明したい。現在は、理論的枠組みとして、ヴィゴツキーの心理システム論（知覚・記憶・思考・情動・意欲といった心理機能間のシステム変動として発達が生じるという理論）の考察をすすめている。人間の心理のシステム性は、社会的な活動のなかで、言葉や道具を介して人びとが関係することを通して変動していく。その心理の発達の変化と社会的活動との関係性を、遊び・いざこざ・ミュージカルという具体的な活動から実証的に解明していくことが研究課題である。</p>			
3 研究助成等 (主要5件程度)	<p>(1) 文部科学省科学研究費 なし</p> <p>(2) 学内 なし</p> <p>(3) 学外 なし</p>			
4 資格・特許等 (主要3件以内)	<p>中学校教諭1種免許状（社会） 高等学校教諭1種免許状（公民）</p>			
著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約
(学術論文)				
状況論的学習観における「文化的透明性」概念について：Wengerの学位論文とそこから示唆されること	共著	2004年6月	北海道大学大学院教育学研究科紀要93号	本論文は、1990年代教育心理学における学習論に新たな潮流（状況論的学習論）を生み出したWengerについて、その学位論文の検討を通して、Wengerの本意が何処にあったのかを明らかにしたものである。保坂はWenger学位論文の6章抄訳を担当するとともに、「正統的周辺参加」という概念が学習のあり方を示すものではなく、学習のあり方を分析するためのツールであることを論じた。（著者：伊藤崇・藤本愉・川俣智路・鹿嶋桃子・山口雄・保坂和貴（pp.115-123）・城間祥子・佐藤公治）
Emergence of creativity in children's play fantasies and world-making	共著	2006年5月	Research and Clinical Center for Child Development (Graduate school of Education, Hokkaido University)	本論文は、2005年度S市内の幼児教育施設において行われた参与観察データに基づき、幼児が共同遊びを通して「意味世界」をつくり上げていく過程について分析したものである。遊びの虚構的・想像的な意味世界は、具体的なモノの使用や身体的行為といった現実世界によって支えられていることを明らかにした。（著者：SATO Kimiharu, KASHIMA Momoko, HOSAKA Kazutaka, NAGAHASHI, Satoshi）

幼児の共同遊びの「ルール」に関する分析視座	単著	2008年6月	北海道大学大学院教育学研究科紀要105号	本論文では、幼児期の子どもたちにとって、遊びのルールとは何なのか、それを子どもたちはどのように実践しているのかについて、理論的側面と実証的側面から論じた。理論面では、幼児の遊びのルールとは感情によって支えられた行為の方向づけとなる「言葉の体系」であることを指摘した。そのことをカルタ遊びの相互行為過程の分析によって実証的に検討した。
「創作ミュージカル活動」を通じた学生の学習・発達過程に関する一考察	単著	2012年12月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第28号	本論文では、第28回拓大ミュージカル『ふたつの空』の活動への参加を通して、学生にどのような学習・発達が生じていたのかについて検討した。ミュージカル公演終了翌日に作成したミュージカル感想文を分析した結果、「ネガティブな感情体験を媒介とした自己変容」のストーリーが共通した記述スタイルになっていることが明らかになった。拓大ミュージカルは活動の過程で葛藤や困難に出くわし、それを乗り越えていく場になっていると考えられる。
「創作ミュージカル活動」における学生の学習過程に関する研究：「拓大ミュージカル感想文」の学年縦断的分析	単著	2014年3月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第31号	本論文では、「拓大ミュージカル」活動に2年にわたって参加した学生の感想文について比較分析を行った。その結果、学生が経験する困難・葛藤の内容が、1年次には未知の活動に従事することで生じるものであるに対し、2年次には集団をまとめたり、1年生に仕事の指示を出したりと、活動そのものを組織することから生じるものであることが明らかになった。
「パフォーマンス」の心理学に向けて：ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用	単著	2015年10月	拓殖大学論集：人文・自然・人間科学研究第34号	本論文では、ヴィゴツキーから着想を得たホルツマンの心理学論に基づき、筆者が実践している「<こころ>と<からだ>をつなぐワークショップ」の理論的な意味付けを行ない、ワークショップにおける身体を用いたエクササイズの分析を行った。
(学会発表・その他)				
園で幼児はいかに他児童間のいざござに関与していくのか：幼児期の社会化プロセスの検討	単著	2004年10月	日本教育心理学会第46回総会 発表論文集	4～5歳の異年齢混合保育の園における自由遊びの時間に生じたいざござを対象に、当事者以外の第三者がいざござの展開にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、幼児のみでいざござが展開する場合、どちらか一方に「加勢」することが多いこと、保育者が介入する場合、第三者はいざござの原因について情報提供を行うことが明らかになった。
幼児の協同遊びにおけるいざござとルールの展開	単著	2005年9月	日本教育心理学会第47回総会 発表論文集	4～5歳児のいざござについて廣松渉の「四肢構造論」に基づいて分析を行った。その結果、いざござの当事者間では同一の行為や発話や出来事であっても相異なる意味を帯びていること、その意味の相違は当事者相互の役割意識の相違にあることを明らかにした（例えば、鬼ごっこにおいてタイムをするという行為は「鬼役として」は「不当」であり、「コ役」としては「妥当」である、というように）。
ヴィゴツキーからみた「遊び理論」の再構築(2)：「ルール遊び」の構造的性質と発達過程の徹視的分析	共著	2006年3月	日本発達心理学会第17回大会 発表論文集	本研究では、2005年5月～2006年3月S市内の幼児教育施設で行った参与観察データから「鬼ごっこ」の場面を抽出し、その活動がどのように発達していくのかについて、ヴィゴツキーの遊び理論に基づいて縦断的な分析を行った。その結果、子どもの行為は単なる「追いかけ」から「相手の動きの先読み」へ、目的（動機）は「追いかけること」から「捕まえること」へ発達することが明らかとなった。

幼児の遊び場面にける「ルール」の発生と展開	共著	2006年9月	日本教育心理学会第48回総会 発表論文集	2006年3月の日本発達心理学会発表に続き「鬼ごっこ」の発達について分析を行った。その結果、ルール認識の発達とルール実践の発達が時間的にずれること（前者が先）が明らかとなった。このずれが鬼ごっこの中での行為の発達を生むのではないかと考察した。
幼児期における「ルール遊び」の発達に関する研究：幼児の動機・行為・ルールに着目して	単著	2007年3月	日本発達心理学会第18回大会 発表論文集	2006年3月及び9月の学会発表に引き続き、「鬼ごっこ」の発達について分析を行った。その結果、「鬼ごっこ」の「おもしろさ」の内容が、遊びに参加する幼児の動機（目的意識）の変化、行動方略の変化、ルール理解の変化と相互に関連しあいながら質的に変化していくこと、それらの変化を通して「鬼ごっこ」という活動全体が発達して行くことが明らかになった。
幼児のいざこざにおける相互交渉過程の分析：身体配置に着目して	単著	2007年9月	日本教育心理学会第49回総会 発表論文集	4～5歳のいざこざの相互交渉過程について、そこで組織される身体配置に着目して分析を行った。その結果、対岸型（いざこざの当事者や第三者が向かい合う）の場合、互いに抗議し合うやりとりが展開すること、車座（当事者と第三者が円を描くように位置する）の場合、争点を解明するやりとりが展開することが明らかになった。いざこざ時の身体配置には相互交渉の質の違いが反映されていると考察した。
幼児期の共同遊びにおけるルール実践過程の微視的分析	単著	2009年3月	日本発達心理学会第20回大会 発表論文集	幼児期の共同遊びのひとつである「カルタ遊び」を取り上げ、その遊びの相互行為過程でどのようなルールが創造され、共有されていくのかについて微視的分析を行った。その結果、幼児が遊び集団全体で喜びの感情を得られるように、ルールの創造、改変、共有を行っていくことが明らかとなった。
幼児のいざこざにおける相互交渉過程の分析（2）：身体動静に着目して	単著	2010年3月	日本発達心理学会第21回大会 発表論文集	幼児のいざこざ場面におけるノンバーバルな身体的な行為に着目し、それがどのような「意味」を生み出す基盤となっているのかについて分析を行った。その結果、視線などの身体動静と言葉が指示する内容とが矛盾を引き起こし、対立を引き起こすことが明らかとなった。
創作ミュージカル活動を通じた学生の学習・発達過程の分析（1）	単著	2012年11月	日本教育心理学会第21回大会 発表論文集	論文『「創作ミュージカル活動」を通じた学生の学習・発達過程に関する一考察』に基づき、第28回拓大ミュージカル『ふたつ空』への参加学生の学習・発達過程について分析し、研究報告を行った。
演劇的ワークショップによる保育実践力の養成について	単著	2015年9月	全国保育士養成協議会第53回研究大会 研究発表論文集	論文『「パフォーマンス」の心理学に向けて：ホルツマン「パフォーマンス」論のワークショップ実践への適用』に基づき、身体表現ワークショップが、保育士の実践力にどのように関連するのかについて検討を行った。
演劇的ワークショップにおける身体表現の分析(1)	単著	2016年4月	日本発達心理学会第27回大会 発表論文集	演劇的ワークショップにおける身体動作がいかなる「意味」を生み出すか分析を行った。その結果、同じ動作でも時間間隔が変化することで、異なる意味が生み出されることが明らかとなった。何を意図して演じるか、ではなく「どのように身体を使うか」が演者の意図を作り出すと考えられる。

研究業績（過去3カ年分）

著作数	論文数	学会等発表数	その他	国際的活動の有無	社会的活動の有無
0	1	2		無	有

学内運営業績

1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	2011年9月～現在	入試広報委員会 委員
	2012年4月～2014年3月	図書委員会 委員
	2014年4月～2016年3月	教務委員会 委員
	2016年4月～現在	図書委員会 委員

学 外 活 動 業 績

1 本学以外の機関（公的機関・民間団体等）を通じた活動 （主要 10 件程度）	2012 年 7 月	留辺蘂高校 出前授業
	2013 年 3 月	深川ロータリークラブ 講話（拓大ミュージカルについて）
	2013 年 7 月	旭川明成高校 進路講話（短期大学について）
	2013 年 9 月	旭川明成高校 出前授業（保育・幼児教育の仕事）
	2014 年 10 月	旭川ふたば幼稚園研修会 講師（幼児のいざごぎについて）
	2015 年 2 月	旭川商業高校 進路講話（保育・幼児教育の仕事）
	2016 年 7 月	ふかがわプレーパーク 運営（2013 年度～2016 年度）
	2017 年 4 月	幌加内高校 <こころ>と<からだ>をつなぐワークショップ：（ソーシャルスキル・トレーニングとして）（2016 年度～）
	2017 年 10 月	介護職員初任者研修（深川市商工会議所） 講師（2014 年度～）
	2018 年 1 月	深川西高校 保健講話（心の健康：2013 年度～）
2 学会・学術団体等の活動 （主要 10 件程度）	日本教育心理学会 会員	
	日本発達心理学会 会員	
	元気村地域づくり研究所 会員（事務局員）	
	深川市保健福祉施策推進協議会 委員（平成 24 年度～）	
	ふかがわプレーパーク実行委員会 委員（平成 24 年度～平成 28 年度）	
	北海道保育実践研究会 会員（平成 27 年度～）	
	日本発達心理学会第 27 回大会 実行委員会 委員	